

家庭の教育力の強化を図る

保護者と教師が幸せになるPTA

半田市立雁宿小学校PTA

1 はじめに

半田市は、知多半島東部に位置し、半田運河や黒壁蔵の風景、赤レンガ建物が残る街並みがある。市内では山車の祭礼が盛んで、地域の伝統や絆を感じることができる市であり、新美南吉の出身地としても知られている。市内の小中学校では『幸せになるための教育』が進められており、市のPTAでは目標を『保護者と教師が幸せになるPTAーすべては子どもたちのためにー』として活動している。

本校は、半田市の中ほどの住宅街にある親池の上に昭和57年に開校された全校児童数438名、学級数20学級（通常学級14、特別支援学級6）、PTA会員数333名の中規模校である。毎年秋に実施している「かりやど祭り」では、学校とPTA、地域が協力して2輛の模擬山車の曳き回しを行っている。



【親池から見た雁宿小学校】

2 研究への取組

(1) PTA組織と活動内容

本校のPTA組織は、「役員」「部長、副部長」「学年委員・部員」「会員」で構成されている。

役員は、会長1名、副会長2名（うち家庭教育委員1名）、書記1名、会計1名、顧問若干名で構成されている。部長、副部長は、「厚生教養部」「広報部」「生活部」の各部に1名ずつ配置されており、各部の中心となって活動をしている。学年委員・部員は、各学年の保護者から6名が選出されて、前述の各部に所属して活動している。

(2) 研究のねらい

PTA活動に参加する保護者が幸せな気持ちで活動できるようにすることと、PTAの活動が保護者や教員にとって過度の負担とならないようにしたいと考え、研究を進めた。

本研究の実践において、学校での児童の活動や学校行事への協力をPTAが中心になって行うことで、家庭がもつ子どもの学校生活への関心を高めることを期待して活動を行った。加えて、PTAと地域、学校が協力し、児童の活動を支援する機会を作ること、保護者、地域、教職員など、学校に関わる人たちの連携が強化され、家庭教育力を高めることにつながるのではないかと考えた。このことが、保護者や地域をはじめとする学校に関わる全ての人が幸せを感じることに、ひいては子どもたちの幸せにつながるのではないかと考え実践を進めた。

3 実践活動の概要

(1) 家庭・学校・地域の連携による活動

① 米作り

本校の中庭には水田があり、役員と6年生児童を中心に餅米作りをしている。

ア 田おこし

春になると役員が田おこしを行う。前年度から役員をしている保護者と新しく役員になった保護者が協力して作業を行うことで、役員同士が打ち解け合える場となっている。

イ 代掻きと田植え

代掻きは役員と6年生の希望者が参加して行っている。児童が水を張った田の中に裸足で入り、楽しそうに足で土を混ぜ合わせる姿が見られた。

田おこしの1週間後、地域で農業を営んでいる方を講師としてお招きして田植えを行っている。代掻きと同様に6年生児童が参加して、苗を一束一束丁寧に植えた。



【田植えの様子】

ウ 稲刈りと脱穀

11月上旬の稲刈りにも、田植えの時と同じ講師に来ていただき、稲の刈り方や稲架掛けの仕方を教えていただいている。米が無事に収穫できたことで、児童も役員も充実感を味わうことができた。稲刈りの2週間ほど後には、足踏み式の脱穀機を用いて脱穀を行っている。脱穀後の米は、近くの農業高校に協力をいただいで粳すりしと精米を行ってもらっている。

② 収穫祭（卒業お祝い餅つき）

3学期には、6年生を対象に収穫祭を行っている。収穫した餅米を使用して役員、6年生の学年委員、役員OBOGや地域の方の協力を得て餅つきをし、米の収穫と卒業を祝う。

児童は、付き添いの大人の支援のもと、力を込めて杵で餅をついていた。児童と大人が「よいしょ」と声を掛け合う姿が見られるなど、温かな雰囲気で行われた。安全に餅つきを体験し、おいしい餅を食べることができた児童は笑顔で会食を楽しむとともに、稲作りから収穫祭までお世話になった役員への感謝の気持ちを高めることができた。



【収穫祭の様子】

③ 飯盒炊飯練習支援

本校の5年生は、夏休み以降に野外活動を行っており、1学期に飯盒炊飯（カレーライス作り）の練習を行った上で野外活動に臨んでいる。飯盒炊飯練習には役員、5年生学年委員、ボ

ーイスカウトの方に児童の支援をしていただいた。

調理の仕方をはじめ、竈として使うブロックの組み方や薪への火の付け方、米の炊き方について指導と支援をしていただいた。米を安全に炊けたり、カレーをおいしく作ったりすることができたことで、児童は自信をもって野外活動の飯盒炊飯に臨むことができた。



【飯盒炊飯練習の様子】

④ かりやど祭り山車巡行

本校では、昭和57年の開校以降、40年以上に渡り行っている行事として「かりやど祭り」がある。内容は時代によって変わってきているものの、一貫して変わらないものとして、学校が所有する山車を曳き回す山車巡行がある。山車巡行は、児童と教職員のみならず、保護者、PTA役員のOBOG、地域の協力なくして行うことはできないものである。

ア 協力者募集

保護者、PTA役員のOBOGに案内を出し、協力者を募集している。また、学校運営協議会の委員を通じて地域からの協力者を募集している。令和6年には中学生のボランティアも募集した。令和6年度は、大人101名、中学生30名に協力者として登録していただいた。

イ 係分担と配置

山車巡行の際、大人の協力者は、山車巡行係と交通整理係に分かれて活動する。山車巡行係は、山車の舵取り等の役割を担っている。交通整理係は、周辺道路の交通誘導を消防団と協力して行っている。

9月になると役員が中心となって巡行ルート周辺の安全と交通状況を把握した上で協力者の係分担と配置を決めている。令和6年度は、中学生ボランティアを初めて募集したことから、中学生ボランティアの活動や人数配置も検討した。



【山車巡行についての話し合い】

ウ 地域への山車巡行の周知

かりやど祭り当日には学校周辺の道路の通行規制を行うことから、山車巡行について地域への周知を行っている。地域への周知方法としては、回覧板による周知と、巡行経路周辺の民家や店舗などへのPTA役員による案内のポストイン等を行っている。

エ かりやど祭り当日の活動

かりやど祭り当日は、中学生ボランティア、交通整理係、山車巡行係の集合時間と活動場所が異なるため、役員が分担

して受付や役割の説明等を行った。

山車巡行時は、安全に山車巡行が行われるよう、児童のために協力する保護者や地域の方の姿が見られた。公道に出た山車の列が無事に学校に戻ったとき、児童の幸せそうな笑顔があふれるのと同時に、協力していただいた保護者や地域の方も充実感をにじませ、児童とともに成功を喜ぶ姿が見られた。学校、保護者、地域が一丸となって山車巡行を成功させ、参加した多くの人が幸せを感じられる時間となった。



【山車巡行の様子】

(2) 持続可能な各部会による活動

児童数の減少によるPTA会員の減少や社会変化に伴い、これまでの組織や活動を続けることに負担を感じる保護者が多くなってきたことから、令和4年度にPTA組織の見直しを行った。見直しでは、役員任期の検討、学年委員数の検討、部の統廃合の検討、部の活動内容の検討を行った。

特に大きな変更としては、学年委員数を各学年12名から6名へと変更したことと、部を再構成したことである。各部の活動においては、従来通りの活動を全て行うと負担が大きくなってしまふことから、毎年4月に各部で前年度までの活動を参考にすることができることを話し合い、活動内容を決めるようにした。

令和5、6年度の活動として、「厚生教養部」はPTA花壇の整備と研修事業の計画、運営を行った。「広報部」は、PTA新聞の編集と発行を令和4年度までより、発行回数を減らして行った。「生活部」は、通学路の安全点検、登下校の見守り活動、交通安全教室への協力、空き缶回収事業の活動を行った。

4 おわりに

本校PTAは、家庭、地域、学校が「子どもたちのために」と協力して活動をしてきた。開校当初に在籍していた児童が今では保護者となり、「自分たちもしてもらってきたから。」と前向きな気持ちで活動に協力してくださっている方がみえる。また、「花壇がきれいだ子どもたちもお客さんも気持ちいいですね。」と熱心に花壇整備をしてくださる方もみえる。

今回の実践では、保護者と地域が大きな負担感を感じることなく、幸せな気持ちで学校の教育活動に参加・協力できるようにしてきた。かりやど祭り、収穫祭等の行事においても多くの児童、保護者、地域の方が笑顔で参加する姿が見られた。これらの活動を通して保護者と地域、学校のつながりが強まっていくことを感じた。また、PTA活動を通して児童の活動に関心を高めることで家庭での親子の会話や関わりを増やし、家庭教育力強化の一助になったのではないかと考える。今後も保護者、地域、教員が幸せを感じ、児童のために協力していけるPTA活動を継続していくことで、家庭教育力の強化を図っていきたい。